

思い出のいろいろ

八南小・6

市野 めいみ

私の家族には、九十二才のひいおばあちゃんがいます。おばあちゃんは今も元気ですが、昔は静岡県に住んでおり、戦争も体験しています。そこで、おばあちゃんがよく作ってくれるいろいろをいっしょに作りながら、戦争をしていた当時の話を聞かせてもらいました。

第二次世界大戦のとき、おばあちゃんは学徒動員として工場で働いていました。しかし東南海地しんという非常に大きな地しんがおばあちゃんの町をおそいました。先生の

「にげる。」

という一言で、すぐに工場から出ようと思いますが、道がくずれ、前に進むことができなくなってしまう。そこで、窓から飛びおり、ドブを飛びこえ、全力で走りました。町は大きくゆれており、建物はほうかいし、かべ土がこわれてほこりがまい、あたりは白くなりよく見ることができなかったそうです。先生からの指示で家に帰ることになります。おばあちゃんの家は無事でしたが、とある生徒は赤ちゃんが亡くなり、家がない生徒もいました。工場のへいはたおれ、たくさんの人が下じきになり、たくさんひ害が出てしまいました。家がいったとき、おばあちゃんはずごくうれしかったそうです。

その日は、小屋という小さな倉庫にわらで作ったムシロというし

き物をしいて一晚を過ごしました。時々おこる余しんはともこわかったと言っていました。

地しんが終わると、アメリカ軍からの大ほうでのこうげきが始まります。大ほうが近くを通ると、ヒューという音とともにばく発音がします。おばあちゃんはあまりのきょうふで夜中にはだしでにげました。山のしゃ面に身をひそめ、大ほうの音を聞いていました。家に帰ると、運よく家はこわされておらず、安心しました。おばあちゃんの小学校の近くにもうたれ、畑の砂がはね上がった、上空を飛行機が通り過ぎていました。学校は穴が空いて一部はこわれていましたが、こわれていない場所で授業を行っていたそうです。学校はほとんどの人が戦争へ出かけてしまっており、直すことができませんでした。

敵に見つからないように、戦争中は電気に黒い布をかぶせたり、森にばくだんが落ち、火事になってきたときは、周りの木に燃え移らないように、父親たちがノコギリを持って木を切って消し止めたりにしていました。

戦争のときは、防空ごうにひ難しても、上にばくだんが落ちて助からなかったり、大きな場所がねらわれたりしました。とにかく、どこにいても危ないような状態でした。豊川でも、そのころBー29が来てばくだんを落とされ、たくさんの人が亡くなってしまいました。そして、八月十五日、第二次世界大戦が終わりました。たくさんの人がぎせいになってしまいました。

おばあちゃんを実際に体験していますが、私たちは体験していないので、くわしく分からないところもあります。でも、戦争がどれだけ悲さんだったかは、知ることができました。おばあちゃんの知

り合いも、何人も死んでしまっていると言っていました。

戦争をしていない国も多いですが、別の地域では今もつねに戦争しています。改めて、平和に過ごせていて感謝をしようと思います。

おばあちゃんと作ったいろいろなものは、完成できました。とてもおいしかったけど、もしおばあちゃんがあのとき必死に逃げていなければ、このいろいろなもの、私もいなかったのかなと思います。

おばあちゃんは九十二才なのでもう少しでいなくなってしまうかもしれません。なので、私たちがこの戦争の話を語りついでいかなければなりません。とても残こくですが、これから起こらないように伝えるのは大切だなと思います。夏休み前にも、平和公園の見学で戦争の話を聞きました。このこともふまえてこれからにつなげていきたいです。